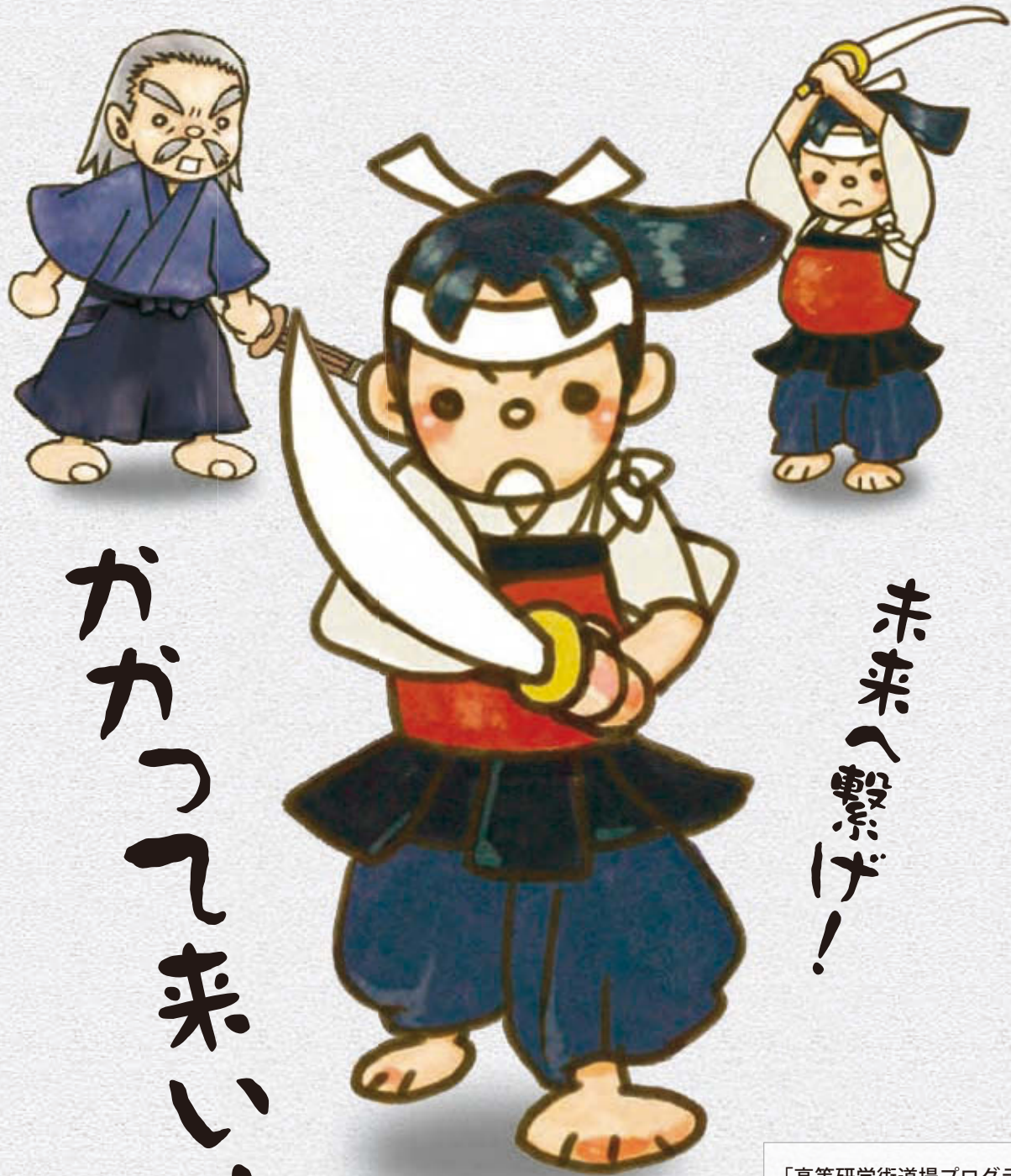


2011年度 道場生 公募要項



「学術の芽」を
見つけ、育てる。

高等研 学術道場プログラム



ガガッて来い！

未来へ繋げ！

「高等研学術道場プログラム」の募集要項とお申し込みは以下の Web サイトをご覧ください。

高等研学術道場

検索





財団法人国際高等研究所 所長 尾池 和夫

Profile

京都大学前総長、京都大学名誉教授（理学博士）
1940年（昭和15年）生
専門分野 / 地震学

次世代を担う若手研究者の諸君！ 高等研に集まる高度の知の出会いに触れながら、 人類の未来に貢献する芽を探して欲しい。

国際高等研究所は、経験豊かな人材の宝庫です。その宝庫を活かし次世代を担う研究者の養成のために、2010年度から新たな試みとして、若手とくに大学院博士後期課程の学生のための、若手研究者招へい事業の「高等研学術道場プログラム」を実施しています。

この学術道場は国際高等研究所の研究プロジェクト15のうち、研究代表者の賛同のあったプロジェクト毎に2ないし3名の席をあらかじめ確保し、それらのプロジェクトに参加する若手研究者を公募し、応募者の中から選考して参加者を認めるものです。

次世代研究者をめざす学生と豊かな経験と高度な

実績を持つベテラン研究者との世代及び分野を越えた交流を促進し、学術の芽を探し育てる議論の過程に参加する経験を持つ機会を提供するものです。

私は、このような形態は既存の研究機関や大学などにはできない仕組みだと思っています。近い将来、この「高等研学術道場プログラム」がこれからの日本の学術研究に大きな貢献をすることができると確信しています。次世代を担う若手研究者の諸君の積極的な参加を待っています。

財団法人国際高等研究所 所長

尾池和夫



「高等研学術道場プログラム」道場生 公募要項

国際高等研究所では、2011 年度の研究事業の一環として以下の内容のものを公募します。

1. 公募事項

- (1) 趣旨：研究者をめざす大学院生に、研究プロジェクトに対等な立場で参画する機会を提供することによって、経験豊かな研究者たちの学術の議論に直接触れながら、将来の研究課題の方向を見極める体験を持っていただきます。これによって、次世代の研究者と高度の経験を持つベテランの研究者との世代間交流を促進し、大学院生に学術の芽を採し育てる議論の過程に参加する機会を創出するものです。
- (2) 研究プロジェクト：2011 年度、高等研では 15 の研究プロジェクトが実施されます。その概要や年間を通じたプロジェクトの実施予定はホームページに掲載されていますのでご覧になり、それらの研究会に参加しようとする意欲的な大学院生を公募します。

2. 開催期日

2011 年度 1 年間に開催される各研究プロジェクトの研究会への参加とします。

3. 採択者数

各研究プロジェクトに 2～3 名程度の採択を予定しています。

4. 応募資格

原則として、大学院博士後期課程在籍の学生（又はこれに準じる者）に限ります。また、応募に係る指導教員又は所属長の下承を事前に得ていることが必須条件となります。同一の研究プロジェクトへの応募者が多数に及ぶ場合は、申込者自身の専門分野と異なる分野の研究プロジェクトへの応募者を優先します。

5. 申込方法

高等研の研究プロジェクトに参加しようとする場合、下記の必要事項を記載した応募資料を作成し、郵送にて国際高等研究所「学術道場」担当に提出してください。応募書式は下記ホームページよりダウンロードしてください。

必要記載事項：

- (1) 申込者氏名、所属・課程・学年、所属先住所、電話、ファックス、e-mail

- (2) 希望の研究プロジェクト
- (3) 参加目的の概略（400 字程度）
- (4) 申込者の研究の概要（400 字程度）
- (5) 申込者の指導教員又は所属長の下承を得ていることが確認できるもの。これには、所属長氏名・所属先および職名を記載してください。

なお、採択された場合、研究参加に伴う行動規範に関する誓約書を改めて提出していただきます。

6. 申込期限：2011 年 7 月 30 日（土）必着

7. 応募資料送付先

〒 619-0225 木津川市木津川台 9 丁目 3 番地
国際高等研究所「学術道場」担当
郵送の際、封筒の表に「学術道場応募資料在中」と朱書きしてください。

8. 選考

選考を行い、2011 年 8 月中旬過ぎに選考の結果を個別に通知します。

9. 所要経費

研究プロジェクトの研究会への出席に係る国内旅費、宿泊費等を本研究所規程に則り支給します。宿泊は、近隣のホテルの他、高等研構内の宿泊施設を利用することもあります。なお、高等研にて採択者を対象に障害保険を掛けます。

10. 研究会等への出席及び報告書の提出

- (1) 採択された若手研究者は、当該研究プロジェクトの研究会への出席を中心として、その前後において関連する議論にも参加していただきます。
- (2) 高等研学術道場プログラム終了後、1 ヶ月以内にレポートを高等研に提出してください。提出されたレポートは、その全部または一部を高等研の報告などに使わせていただくことがあります。

この公募内容につきまして、不明な点がございましたら、e-mail にて国際高等研究所「学術道場」担当 (doujou2011@iiias.or.jp) にご照会ください。

応募方法などについての詳細はホームページ <http://www.iiias.or.jp/doujou> をご覧ください





● 高等研の研究事業方針

国際高等研究所は、従来の学問分野を超えて、異分野の研究者たちの相互理解と緊密な接触を図る場を提供することを最大の特徴としています。この特徴を背景に、知の対話型蓄積により、次世代の「学術の芽」を発掘し、さらにその「学術の芽」を育てることを、研究事業の主たる目的としています。

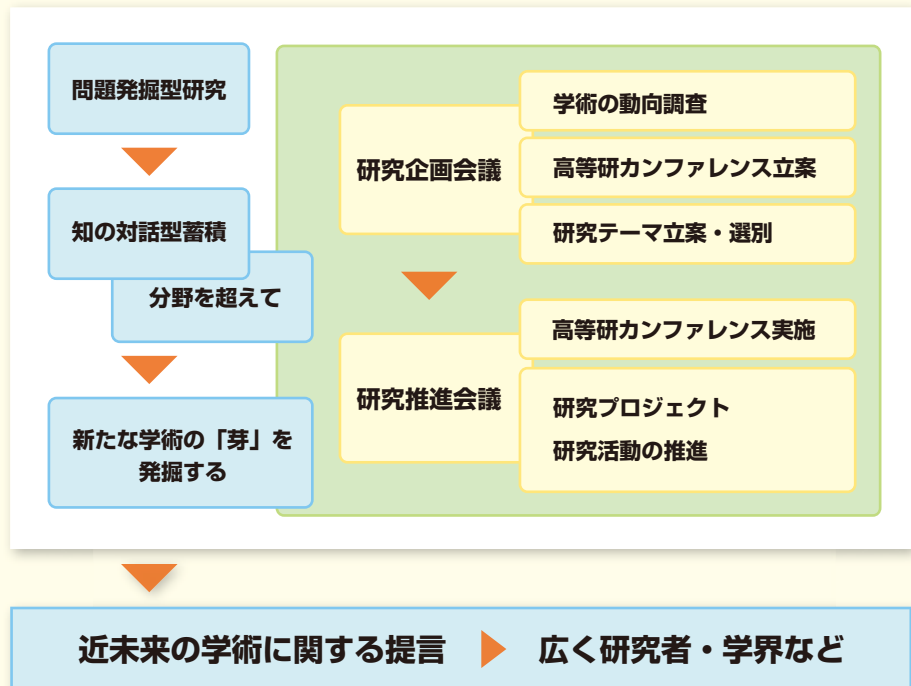
国立大学や国立研究機関等が法人化された後、研究費の比重は大幅に競争的資金に移りました。また、科学技術振興という名の下に、国の施策として特定な課題や領域に大きな研究費が与えられ、結果的に研究者をその課題や領域に集中させる傾向が強くなってきています。我が国が置かれている状況を考慮すれば、このような「問題解決型」の研究は必要ですが、現在のように「問題解決型」研究が過剰に偏重され続けると、ある問題に関しては詳細な知見が蓄積されてはいきますが、やがてそれさえも枯渇します。そして新しいコンセプトを創出するようなブレイクスルー、大きな科学の展開は期待できなくなります。

これに対し、研究者個人の発想を基本にする研究が「問題発掘型」の研究であり、これこそが学術研究です。多くの場合、「問題解決型」の新たな課題(学術の芽)は、「問題発掘型」の研究成果や知見の中から生まれてきます。したがって、「問題解決型」研究と「問題発掘型」研究のバランスをとって行われることが必要です。

このようなわが国の状況において、自然科学、人文・社会科学等の分野を超えて、次世代の学術研究の展開のために「学術の芽」を探索し、それを見つけ、育成するという本研究事業は、きわめて大きな意義を持つものであります。

本研究事業を通して、国内外の優れた研究者が議論する場を提供することにより、単に研究成果の国内外への発信ということだけでなく、広く研究者、学界等に向かって、新たな学術研究が展開する可能性やわが国の学術研究の将来のために重要な問題を提示したいと考えています。

● 次世代に向けた学術の芽の発掘と育成に関する研究



期待される効果

学術における異分野の研究者が積極的に交流する場を提供する本研究所の特色を活かすことにより、次世代の学術研究の課題を探索し、育成することにより、我が国の学術研究の進展に貢献する。



● 研究企画会議

研究企画会議は、所長・副所長及び学術参与で構成され（10名以内）、国際高等研究所の中核研究事業の基本的考え方とその内容を明確にし、強力なリーダーシップのもと研究事業の推進を図ります。その主な機能は、下記のとおりです。

- 研究プロジェクトの立案と選定
- 高等研カンファレンスに係るテーマ設定とオーガナイザーの任命
- 学術の動向や研究テーマの在り方と展望に関する調査と研究
- 研究推進会議委員、フェロー等の選考
- その他、高等研の研究活動に係る諸課題に関する所長の諮問に応じた検討、あるいは所長への建議



● 研究推進会議

研究推進会議は、副所長及び外部の様々な分野の著名な学識経験者で構成され（15名以内）、研究企画会議で決定した事項について、その実行計画の具体化を図ります。その主な機能は、下記のとおりです。

- 研究プロジェクトの推進に係る所長・副所長の補佐、研究プロジェクトの進捗状況の把握と評価
- 高等研カンファレンスの実施計画の策定
- 学術の動向や研究テーマの在り方と展望に関する調査と研究
- 研究推進会議委員、フェロー等の選考
- その他、高等研の研究活動に係る諸課題への対応

また、個別課題実施のために必要に応じて適宜ワーキンググループを設置します。





2011年度・高等研学術道場プログラムの公募対象テーマは、
下記★の付いた13件の研究プロジェクトです。
この中からご希望のプロジェクトをお選びください。
次世代を担う「若き剣士=若手研究者」のあなたの積極的な応募を
お待ちしております。



● 公募対象の研究プロジェクト

期 間	主軸プロジェクト	研究代表者
2010-2012	意識は分子生物学でどこまで解明できるか？（第2年次）	山森 哲雄
★ 2011-2013	心の起源（新規3年計画・第1年次）	松沢 哲郎
★ 2011-2013	ケアを基盤とする社会保障システムの新たな構築 （新規3年計画・第1年次）	西村 健一郎

期 間	研究プロジェクト	研究代表者
2009-2011	法と倫理のコラボレーション—活気ある社会への規範形成— （第3年次）	服部 高宏
★ 2009-2011	21世紀における文化としての設計科学と生産科学（第3年次）	岩田 一明
★ 2009-2011	諸科学の共通言語としての数学の発掘と数理科学への展開 （第3年次）	高橋 陽一郎
★ 2009-2011	受容から創造性へ —近現代日本文学におけるスタンダードの場合（第3年次）	ジュリー ブロック
★ 2009-2011	宇宙における生命の総合的考察とその研究戦略（第3年次）	海部 宣男
★ 2009-2011	天地人—三才の世界： 宇宙・地球と人間の関わり合いの新しいリテラシーの創造（第3年次）	尾池 和夫
★ 2009-2011	メタマテリアルの開発と応用（第3年次）	石原 照也
★ 2010-2012	交渉学の可能性 —新しい世界の関係構築と紛争の予防のために（第2年次）	松岡 博
★ 2010-2012	ジェンダーからみた家族の将来（第2年次）	姫岡 とし子
★ 2010-2012	アジア・デザイン・エンサイクロペディアの構築（第2年次）	藤田 治彦
★ 2010-2012	宗教が文化と社会に及ぼす生命力についての研究 —禅をケーススタディとして—（第2年次）	天野 文雄
★ 2010-2011	単分子エレクトロニクスの現状認識と近未来実現へ向けての 中核体制構築（第2年次）	冨田 博一

